



現代文学大系別冊・非売品

現代日本文学史

昭和三十八年九月十日発行

著 者 吉田精一

発行者 古田晁

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五(代表)
振替東京四一二三

晚印刷・鈴木製本

阿久沢芳子殿寄贈

現代日本文学史

吉田精一

筑摩書房

一	時代概観	三〇	二	戦後文学の三潮流——民主主義文学と既成作家のむれ	一五
二	左翼文学	三三	三	「戦後文学派」の特色	一八
三	新感覚派からモダニズムへ	三三	四	その他の戦後文学作家群と問題意識の衰弱	一九
四	芸術派の新作家群	三六	五	演劇	二二
五	大家群の活動と非マルクシズムの評論	四〇	六	詩歌	二五
六	昭和文学の転換	四四		あとがき	二九
七	戯曲	四八		現代日本文学年表	二〇
八	詩歌	五二			
一	敗戦直後の状況	一六			

目次

近代文学史の時期区分

五

第三期

一 自然主義文学運動

五

第一期

二 自然主義の小説

六

一 文明開化と啓蒙思想

八

三 漱石と鷗外

七

二 翻訳文学と政治小説

五

四 耽美派の文学

七

第二期

五 白樺派の理想主義

八

六 新思潮派の文学

九

一 逍遙と二葉亭

三

七 心境小説と私小説

一〇

二 硯友社の運動と文学界

五

八 詩歌人のむれ

一〇

三 浪漫主義の小説

七

四 浪漫主義の詩歌

五

第四期

近代文学史の時期区分

日本の近代文学史は、明治維新以後をもってはじめるのがふつうになっています。つまり、ヨーロッパの市民社会成立のきっかけとなったフランス革命に匹敵するものは、日本の場合においては、明治維新以外にはないわけです。そして、それ以前の封建社会と区別をするところの日本の市民社会は、やはり明治時代以後をもってはじまったとせざるを得ません。

しかしながら、それに先立つ啓蒙思潮時代——十八世紀の啓蒙時代というのは、日本の場合にあつては、主として維新の革命以後に含まれることになるので、一八六八年からはじまる日本の近代は、実はフランス革命、すなわち一七八九年よりもさらに数十年をさかのぼる、二百数十年間にわたるヨーロッパの歴史を、百年たらずのうちに含むということになります。ということは、明治以後の社会も、文化も、かけ足で近代社会の建設に向かったことを意味する。そこに、西欧の文化史にない混乱、雑駁、あるいは未熟といったような原因が見てとれるわけであります。

ところで、近代のすぐれた文学史家であり、また、すぐれた批評家でもあったアルベール・チボードの「フランス文学史」を見ると、フランス革命以後、ほぼ三十年を一つのゼネレーションとして時

代を区分しており、さらにそれを二分して、ほぼ十五年ごとぐらいに一つの曲り角、一つの危機にぶつかるといふふうに考えています。

しかしながら、この区分法をそのままわれわれの文学史にあてはめることは、ちょっとむずかしい。日本の場合には、さっきも言ったような意味で、駆け足で進んでいかなければならないという理由があった。早足で、欧米の諸強国に追いつかなければならないという理由があったために、大体において、二十年前後をもつて一つのゼネレーションと見、さらに十年ごとに一つの曲り角にくと考えたほうが、より適当であります。

作家をとってみても、十年間が作家としての平均寿命になっている。少なくとも、大正時代、昭和の初期まではそういった工合であった。十年もてば、近代作家としては、むしろ一流といっている。

そういうふうに見ていくと、坪内逍遙の「小説神髓」、あるいは尾崎紅葉の硯友社などが結成された時期ごろまで（一八六八―一八六）を第一期として、それから、日清戦争をはさんで日露戦争前後まで、つまり自然主義文学がおこるまでの時代（一八七―一九〇五）を第二期と考える。そして、明治三十九年の自然主義の文学運動以後、大正十三、四年までのプロレタリア文学や、新感覚派のおこってくる時期まで（一九〇六―二五）を第三期、大正十四、五年から終戦まで（一九二六―四五）を第四期、そして、終戦から以後、戦後の時代を第五期というふうに区分することが適当だろうと思います。

その間、明治十年前後までは、ほとんど新しい時代の文学というものは見られない、江戸文学の継承時代でありました。十一年ごろからは、翻訳文学がさかんになって、新しい文学のあけぼのの光がさしはじめる。そして、第二期の明治二十年前後からは、多くの作家が一度に出て来て近代文学の朝

明けをむかえるわけです。それが、二十七、八年の日清戦争によって一つの曲り角に来て、観念小説とか、悲惨小説とかが生まれ、文学に対する思想性の要求が強くなってくる。そして、また、個人の自覚とか、自我の要求とかいうことが強く前面に押し出されて来ます。

第三期は、自然主義の運動で開幕されますが、やはり大正三年（一九一四年）の第一次世界大戦によって一つの曲り角にあります。デモクラシーの思想の横溢とともに、文芸思潮の上でも、自然主義と非自然主義文学運動との分れ目がそこにできる。そして、昭和とともににはじまる第四期においても、昭和九年前後にプロレタリア作家同盟が解散し、プロレタリア文学が弾圧によってなくなってしまう、そこで小さい曲り角が一つできます。こんなわけで、ほぼ十年ごとに、そういった変化がおこっていると見ることができます。

第一期

一 文明開化と啓蒙思想

最初の二十年間は、文学史のほうからいえば、文学が人間生活の上で、あるいは社会、文化の上で、いったい、どういう意味をもっているかということ、いわば徐々に認識していった時代であると考えてもいい。作品そのものとしては、見るべきものはほとんどありません。フランスの啓蒙思想期に比べるべきものとして、この時代には、百科全書的な学者が多く出ている。たとえば福沢諭吉とか、にしあまね西周とかいったような人々です。福沢は、一人で、西洋の事情、地理、歴史、文化、制度、物理、化学、演説法、あるいは射撃法、簿記法といったように、翻訳ではあるけれども、ヨーロッパの物質文明、合理主義文明のほとんどあらゆる面についての紹介を行なった。これは、日本が独立して、文明を保つていくために、すなわち国体を保つためにそのような知識が必要だと考えたからです。

また、西周は、「百学連環」という、日本最初の百科全書を個人でつくりあげており、社会思想や、

哲学あるいは美学の方面に、すぐれた見識を発揮しました。人によっては、——西は森鷗外の同郷の先輩ですが——鷗外以上のスケールをもった学者であるように存在です。

ほかに史学者でまた経済学者であつて、「日本開化小史」によつて、はじめて西洋の史学を撰取した眼で日本の歴史を見直した田口鼎軒たぐちていけんがいます。

この西、福沢、田口などを問わず、大体において、この時分の思想の基礎になつたものは非常にプラグマティックな、実用主義的なものであつた。役に立つがゆえに真理である、というような面が多分に見えます。けれども、西の場合などには、学問は必ず実行を伴うべきものであるとして、学術を、学と術とに分けているが、知識（観）を先にして行動（行）をあとにしているという面では、いわゆるプラグマティズムとは違つています。

このほかに、福沢の物質あるいは実用主義に偏した考え方に対して、精神とか、道徳の方面で、市民社会にふさわしい個人道徳、個人主義精神を説いた人には、中村正直などがあつて、正直がスマイルスの「セルフ・ヘルプ」を訳した「西国立志篇」という、明治四年に出た翻訳書は、当時の青年たちをつよく刺激して、広く愛読されたものでありました。「西国立志篇」は、欧米の偉人や学者が、どういうときに志を立てたかという逸話を書いたものであります。多少ともキリスト教的な理想をもつた自由主義精神にのつたもので、福沢の「西洋事情」などとともに明治の「聖書」とよばれ、明治皇后が明治六年女学校に臨んだ折、生徒に一部ずつ下賜されたということです。

この時代の初期には、いままでの日本の古い伝統を否定して、外国の真似をすることが、すなわち文明開化であり、日本をよくする方法であると信じられ、ほとんど無条件に、無批判に模倣するとい

う状態が見られました。

政府が先立ちになって、たとえばちょんまげを切るのがいやだとか、あるいは昔の武士で刀をどうしてもはなさないといったような、保守的な国民たちを引きずっていったので、政府のほうが、一般国民よりも進歩的でありました。

はじめて小学校が東京府の六か所に置かれたのは明治三年であるけれども、学制が發布されて、義務教育制が実施されたのは明治五年です。日本の義務教育は、世界にその比を見ないくらいに普及したのですが、最初の国語の読本などは、ほとんどすべて英米のものを翻訳したものでした。たとえば明治六年に文部省の編した、小学読本の巻一の第二回には、こういう文章がのっている。これは翻訳で原文は次にのせたようなものです。（唐沢富太郎「教科書の歴史」による）

「此猫を見よ 寢床の上に居れり

これはよき猫にあらず 私の手を載するときに 猫が私を嚙むべし。……」

See the cat!

It is on the bed.

It is not a good cat.

Will the cat bite me

if I put my hand

on her?.....

これは、ウィルソン・リーダーの直訳です。同じく第五回には、「こどもの朝の祈り」——“A child's morning prayer.” というものの翻訳がのっている。

原文では、

A child's morning prayer.

O, God. I thank thee that the night,
in peace and rest hath passed away.

And that I see in this fair light,

My Father's smiles, which make the day.

とはじまっています。

その文章を次のように訳しています。

天津神、再拝、昨夜も無難に過ぎて大幸なり、

今朝、夜明けて光りを下し給ふにより、父母の息災なる顔を見ることを得たり、多謝

そして、さらに括弧して、「天津神とは、アマノハナカヌシノカミ天御中主神、タカミムスビノカミ高皇産靈神、カミムスビノカミ神皇産靈神、天照大神を云ふ」という注を加えています。こういう滑稽なはき違えが見られます。

東京大学は、江戸時代の蕃所取調所のあとを継ぎ、また官学を主としたしょうへいこう昌平黉を合わせて、明治二年にできているけれども、ここでも最初のうちは、和漢学をのぞくと、テキストは、大体英文のものを使っていました。教師も外人が多く、また日本人といえども英語で講義をするという状態でした。ほかの学校の様子を見ると、たとえば島崎藤村の出た明治学院は、明治二十年の創立で、ミッション・スクールだからでもあるけれども、教師はほとんど全部、アメリカ、イギリス両国の人のみで、日本人は、わずかに講師が二、三人いるにすぎません。そして、普通学部（中等学校程度）では地理とか歴史とかも、すべて、アメリカもしくはヨーロッパのもので、先生も英語で講義をしています。

また正宗白鳥の出た岡山県の藩校でもと漢学塾であったしずたにこう閑谷黉の教目（明治二十五年）を見ても、これは小学校をおえた年頃からはい、中学校にあたるものですが、全体の科目を、兵式訓練をのぞくと、英学、漢学、数学の三つに分けて、英学は十二単位、それから漢学八単位、数学八単位というようなわりあいになっています。英学の中には、やはり外国の地理、歴史などを含んでおって、日本のものはありません。国語をはじめ、日本に関するものはほとんど学科目の中にはいっていないのです。

ドイツの医者で日本の大学に招かれて、東京大学の医学部創設にあずかった、ドクター・ベルツは、明治九年に、ある日本人に日本の歴史のことを尋ねたところ、彼らの一人は「何も彼も野蛮至極であった」といい、他の一人は「我等は歴史を持っていない。我等の歴史は、今からはじまるのだ。」

と叫んだのをきいて、「今日の日本人は、自身の過去については、何事も知る事を欲していない」と考えています。そして、固有の文化をこのように蔑視することは、国威を外人に対して宣揚する所以ではない。古代文化の合理的なものは尊敬すべきだ。伝統を基礎にしないで、そういう態度をとるということは非常に損である、という批評を日記の中に下しています。しかし、ある時期まではこんなふうで、英語をもって日本の国語にせよという意見が、森有礼によって出されているし、あるいは、日本人の人種を改造するために、日本の女性になるべく外国人と結婚をして、あいのこを生めというような人種改良の意見もまじめに出されています。

これらは明らかな行きすぎで、極端に走ったものですが、しかしながら、一方からいえば、このように欧米の文明に対して無批判に追隨したことが、東洋の諸国のうちでただ一つ日本が、最も早く憲法をもち、また一流の強国になった原因であるともいえます。必ずしも、全然その方針が間違っていないとはいえません。

明治六年（一八七三年）にはキリスト教が禁を解かれて、一般の人の信仰を許すということになりましたが、このキリスト教と、同じく六年征韓論に破れて辞職した坂垣退助達によっておこされた自由民権運動が、それ以前の江戸時代と明治以後とをはっきりと区別する二つの思想的な事件であったといえるかもしれません。明治時代の法律、制度、学問などを作り、または支えた人々は、初期のキリスト教の伝道者や、牧師などとともに、だいたいにおいて、幕臣もしくは反薩長的な立場にいた武士たちであった。政府の登用した学者たち、たとえば西周とか、加藤弘之とかは幕臣で、自分の知識を

政府に提供したわけです。一方のキリスト教にはいった人々は、いわば日本の文化を守ろうという意味もあって、あるいは日本の文化を推進するためにキリスト教にちかづいたのです。はじめからキリスト教を信じたというのではなくて、それに近づかなければ、日本の文化を推進することができないというような意味で近づいていった気味合いがあります。

もちろん、キリスト教の教会の建物であるとか、新しい、全然それ以前になかった、オルガンを伴奏にする音楽であるとか、あるいは日本で最初の唱歌である讃美歌であるとか、そういったようなものの魅力はありました。あるいは、封建時代に見られない男女が親しく交際する、たとえばクリスマスのつどいをするといったような、男女交際の上での新鮮さというようなこともたしかに魅力であったに違いありません。しかし、明治十五、六年ぐらいまでは、日本の思想的な指導者たちには、非常に反キリスト教徒が多く、福沢諭吉のごときは、「時事新報」で、ほとんど毎日のようにキリスト教を弾劾^{だんかく}しています。また、自由民権運動に従った人々の中には、キリスト教徒が相当多い。キリスト教徒の中にも、逆に自由民権を主張した人もあって、一時は、この二つが同一視されて、そのために迫害を受けることも多かったのです。しかし、次第に年とともに、それは改まってゆきます。一つにはキリスト教が、日本の場合においては新教が主であるが、——教育事業とか、慈善事業を非常に盛んにして、知識人の中に入ってしまった。「行為の宗教」というようなあんばいに、——信仰の宣伝とともに、文化運動を非常に行なったというようなこともあって、新しい知識のある青年たちをひきつけることに成功しました。

たとえば讃美歌が、新体の詩に非常に大きな影響を与えました。国木田独步、北村透谷、島崎藤

村、岩野泡鳴というように、のちの日本の文学の中心をなした人々が、一度はキリスト教徒として、教会の門をくぐっています。こんなふうで、とくに浪漫主義ロマンの文学活動には、キリスト教がある程度親密な関係をもつようになっていきます。

二 翻訳文学と政治小説

ところで、先に言った第一期の文学で注目すべきものは、まず明治十年以後の翻訳文学と、政治小説です。その前に、江戸文学の残りものとしての戯作文学があって、ここの代表作家が、かながきろ仮名垣魯文ぶんです。

彼は、たとえば十返舎一九の「東海道中膝栗毛」の模倣をして、弥次郎兵衛、喜多八をロンドンにまで旅行させる「西洋道中膝栗毛」を書いていくけれども、この種の作品は、結局は明治初期の世相あるいは風俗の表面に触れたにとどまって、なんら新時代の精神を体得するにいたっていません。その意味で、文学上における啓蒙思潮を代表し、そして、いわば江戸と明治との両時代の橋渡しになって、後のほんとうの意味の近代文芸を招いたのは翻訳文学及び政治小説でありました。明治十年代を翻訳文学時代というのは、つまり創作の方面に見るべきものがほとんどなくて、翻訳もしくは翻案ものが、文芸の中心的な位置を占めたからです。

この時期には、イギリスのものではシェークスピア、リットン、ディズレーリ、スコット、フランスでは、ベルヌ、フェネロン、デュマ、ユーゴー、さらにロシアでは、虚無党の活動を中心にした虚